

Bゼミ

2020/06/12 片岡



序章

前史

第Ⅰ部 コニーアイランドー空想世界のテクノロジー

第Ⅱ部 ユートピアの二重の生活ー摩天楼

第Ⅲ部 完璧さはどこまで完璧でありうるかーロックフェラー・センターの創造

第Ⅳ部 用心シロ！ダリとル・コルビュジェがニューヨークを征服する

第Ⅴ部 死シテノチ(ポストモルテム)

補遺 虚構としての結論

レイモンド・フッドの多彩な才能

「相互に排他的な関係にある立場間の折り合いのつかない食い違いをそのまま宙吊りにするアーバニズム理論(=マンハッタニズム)」から導かれる定理を現実空間に実現させるとき、フッドだけが相反する二つの立場を同時に考えることができた。

フッドの成功は、空想=実用主義によって、マンハッタンの野心(=あらゆるレベルにおける**過密の創造**)に客観的外観を持たせることにものであった。

多目的機能を持つ教会の建設では、**垂直分裂**によって、象徴としての活動の整合性を無視して空間を自由に積み重ねられるようにした。

「ひとつ屋根の下の都市」では過密に関わる運動をビル内部の垂直運動に置き換えることで、「マンハッタン一九五〇」では巨大なビルの山によって過密を増大させることで、過密の解消を計ろうとした。

ロックフェラー・センターという名のすべての建物

ロックフェラー・センター…究極的・決定的なマンハッタンを構成する最初の建物 が持つ
二重の逆説

- ・「最大限の過密と最大限の光と空間の獲得をともに目指すものでなければならない」
- ・「全体は、…『利益の最大限の追求と美しさを可能な限り一致させる商業センター』を
中心にして設計されなければならない」

ロックフェラー・センターは、同一の場所で共存する五つの異なるイデオロギーに基づくプ
ロジェクトとして読まれるべき←作者の考え

ボザール式の設計と地下鉄の駅、グラウンド・フロアを埋め尽くす複数の劇場、過密の必
要性を否定するメディア、過密の文化に応える強化された自然、光と空気と植物からなる空
間の実現

→すべての逆説を解決、以後メトロポリスは完全なものとなる

ラジオシティ・ミュージックホール 娯楽の陽は決して沈まない

ショービジネスのプロであるロキシーは、ラジオシティ・ミュージックホールで「加速化された時間と過度の健康状態を組み合わせ」たが、これにより演目の内容を陳腐化させてしまう。未使用の完備された設備・施設と出番待ちのロケッツと動物たちは、この危機的状况から「無内容」に基づいた、非人間的な協調行動の展開という新しい内容を生み出し、それを維持する。

五番街のクレムリン

メキシコの壁画家リベラは、視覚による大衆扇動家でもあった。リベラはネルソン・ロックフェラーに招かれ、〈新たなるフロンティア〉を主題としてRCAビルの、メイン・ロビーの壁画を描くことになる。リベラはこの場所に自分の赤軍行進を出現させ、マンハッタンに共産主義の蜃気楼を定着させようとする。これはマンハッタン内部のイデオロギー的に未確定の領域を私的に専有することであるが、ロックフェラーが挙げた主題からは少しも外れていなかった。のちに壁画は永遠に破壊された。

ふたつの追記

完全なる創造の真骨頂を極めるRCAビル最上階のレインボー・ルームでは、建築の方が不完全さを持つ人間より上位となる。サフノフスキー伯爵は人間に流線のデザインを取り入れ改造する考えを発表する。過密の文化においては流線化は進歩であり、スムーズな過密を導く。フッドは入院中も自分の考える建物の設計に意欲を持っていたが、恐慌により仕事はなく、究極のマンハッタンの最初の断片であるロックフェラー・センターは予想し得る限りの将来において最後のものとなった。

究極的なマンハッタンを組み立てる最初の建築であるロックフェラー・センターは、マンハッタン住民により構成された**委員会**によるものであること、決定を延期して自身の質的向上を求め続けることで完成した。
マンハッタンでは、製作者自身の主張の「完璧」な実現が行われたが、必ずしも成功とは一致しなかった。